

## 「漁民義人塚」

## 富山県射水市

この辺りは早くから漁業が盛んで、万葉にも詠まれた漁場である。魚を集荷して商う五十集屋(いさばや)という魚商人も早くからみられた。藩政のもとで金沢城下の特権階級が食膳に鮮魚を求め、魚を金沢に出荷させるために魚問屋を制度化し、金沢登りの屋形商人や高岡の場所行き商人を指定し、放生津には六軒問屋という特権商人が生まれた。彼等は、漁師に前渡金を貸し付けて漁獲物の全てを集め、1割の口銭を取って売り捌いていた。



漁民義人塚

享保元年(1716)は、大不漁の年であった。「2,3月は海が大荒れで出漁できず、4,5,6月は不漁、秋は不作で物価が高騰、10月10日海が大荒れで漁船が遭難し海死も出る、12月1日高潮の被害甚大」という記録が残っている。荒れに荒れた漁民生活のうちから漁場改革の気運が高まっていった。

六軒問屋は、役人に賄賂を送り取り入る反面、貧しい漁民に漁具の購入資金も貸さず、買い込んだ魚の代金の支払いを延期したり払わなかったりした。漁民は激昂して、ついにバンドリを着た400名が金沢の街になだれ込んだので、住民は騒然となった。

金沢の公事場(くしば)奉行所は2名の総代を残し、駆け込んだ他の漁師を帰郷させたが、2人は奉行の叱責に屈せず、賄賂の事実を挙げて六軒問屋の罪を問うた。奉行は駆け込みの範疇を越えた暴挙と官吏侮辱の罪で死刑を言い渡した。

この事が藩主の耳に入り、「直ちに奉行を免職し2人の罪を許す」との急使を差し向けたが、既に斬罪の後であった。

このあと藩は六軒問屋を廃止し、代わりに放生津漁場(市場)を設け、6人の吟味人を置いた。1割の口銭は8分に改められ、この中から吟味人の役料を賄い残金を六軒問屋からの借金に充て、向こう10ヶ年の年賦で返済することにした。借金は8年で完済し、なお残金が出たので、これを不漁・海難の運用資金に充てることとした。

### みどころ



- 海王丸パーク:パーク内に係留されている帆船海王丸は、その優雅な姿から「海の貴婦人」の愛称で親しまれ、月1~2回の総帆展帆を披露している。このほかパーク内には、イベント広場・日本海交流センター・野鳥園・みなと交流館等の施設がある。
- 内川の橋めぐり:かつての放生津潟(現在の富山新港)から市街地を貫流する内川。その全長2.5kmの間に15の橋が架けられ、桜並木・雪景色が川面に映えて四季それぞれの風情を見せている。両岸に係留されている漁船の群れは、港町情緒を漂わせている。